

恩師・加古宜士先生を偲んで — 「人生を力の限り生きる」 —

加古宜士先生がご逝去され 1 ヶ月以上経ったが悲しみは癒えない。覚悟していた事であったが、いや加古先生ご自身から「覚悟しておくように」と言い渡されていた事でありながら若輩者の私はとてもこの現実を受け入れられないでいる。

あれは加古先生が早稲田大学に着任されて間もない 1997 年 4 月 25 日（金）の午後 4 時過ぎだった。博士論文の執筆に取り組んでいた私はその日も加古先生にご指導を戴く為、先生を早稲田大学の正門前でお待ちしていた。先生のお顔を拝見した瞬間に私は異変に気づき「病院へ行って下さい」とお願いしたが、先生はいつもの穏やかな表情で「寝れば直るから」とおっしゃったので、そのまま龍ヶ崎のご自宅へお送りした。無論これがその後 9 年半に及ぶ加古先生の病との壮絶な戦いの始まりとなるとは先生ご自身も知る由もなく、私はあの時無理矢理にでも先生を病院へお連れすればよかったと、今でも心の中に後悔の念が消えない。結果、体調異変から 3 日目の 1997 年 4 月 28 日（月）に先生は緊急入院された。この入院中に加古先生は還暦を迎えられ、病院で寂しくお誕生日のお祝いをした時の写真が私の手元に残っている。

思い起こせば入院に至る数年間、私は加古先生の寛容なお心に甘え、深夜、時には徹夜に及ぶ論文指導を週に 3 日以上ペースで受けていた。空がしらじらと明けてから筑波大学の研究室を後にし、先生を江古田の官舎へお送りすることもしばしばであった。翌朝には重要な審議会の会議を控えていても、日曜日や祭日であってもご自身の予定や都合を全く口にされず、また時には週に一度の龍ヶ崎のご自宅へ帰られる予定を変更してまでも論文指導を根気良く続けて下さった。加古先生は、学部ゼミ生に対してもゼミナール大会前日にご自宅で夜を徹して論文指導をされることはあったが、筑波大学に着任されてからは我々社会人大学院生のために夜を徹してご指導下さることが日常化していた。このような長期に渡る睡眠時間を割いてのご指導が健康を害される引き金となったことは間違いなく、私は自責の念に耐えない。もしこの頃に無理をされていなければ、きっと今も元気にお仕事を続けていらしたのではなかと思えてならない。

加古先生の輝かしい業績や各要職に就かれてからのご活躍ぶりについては多くの皆様をご承知の通りである。しかしその裏で重大な病を抱えながら健康への不安を一切顔に出さず、また私ども周囲の者には病状については他言しないようにと周知され、にこやかにそして平然と職務を全うされ続けたお姿は輝かしく毅然としたものであった。それに引き換え私は、先生健康を案じながらも何のお役に立てるでもなく、ただ周りでオロオロするばかりの日々であった。記憶をたどれば加古先生は、1994 年に交通事故に遭われ頭上と耳に大きな怪我をされ大手術を受けられた際も、仕事を全く休まれている。それどころか人前に出られる際には包帯を外され、事故のことを一切口に出すこともなく平静を装っていたことを思い出す。また、ご家族のご不幸の知らせを受け深い悲しみにあっても、

人前ではいつもと変わらずにこやかな表情で過ごされていた。そのような時加古先生はまるでご自身に言い聞かせるように「運命だから仕方ない」という言葉を口にされた。

2002年12月企業会計審議会会長への就任が内定した際には「体調と相談しながら大役を楽しみたい」とおっしゃり、その後の度重なる検査、手術のための入院の際も、辛い表情は一切お見せにならず、それどころか生き生きと楽しそうに病室のベット脇に机を並べてにわか研究室に仕立て上げ原稿を書かれたり、病院から審議会へ通われていた。

加古先生は過酷な運命を背負われながらそれをご自身で十分に自覚し、またその運命にしっかりと立ち向かっておられた。今年の8月末には「余命は2ヶ月」とご自身で私に説明され、「この10年間でやりたい事は全て出来た」「思い残すことはない」とおっしゃり、涙をこらえる私に「この現実をしっかり受け止めるように」と諭された。

「この人生を力の限り生きる」。加古先生が卒業するゼミ生達一人ひとりに手渡して来られた自筆の色紙に書かれている言葉である。加古先生は、まさにこのお言葉通り満身創痍の中にあっても、力の限りわが国の会計制度の発展のためにご尽力された。

永眠される1週間前の11月30日、病室で「先生」と声をかけると目を開けられ、いつもの穏やかな表情で一言、二言、耳に届かない小さな声で私に言葉をかけて下さった。先生のご冥福を祈りながら、最後に先生は私に何を伝えようとしていたのかを時間をかけてゆっくりと考えていきたい。

先生、本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。どうぞ安らかにおやすみ下さい。またあちらの世界でご指導いただける日を楽しみにしております。

拙稿「加古先生を偲んで」『企業会計』2007年3月号